

野菊と咲きて、小桔梗に、
水引草にいろくの
露染衣、虫の音も、
高吹く風も追々に、
ひと葉ひと葉と水に散る
岸の櫻の紅葉さへ、
夢追ふ胸になつかしく
また堪へがたき淋しさを
この天地にさそひ來ぬ。

ひと夜、月いと明くして、
咽ぶに似たる漣の

岸の調も何となく、
底ひ知られぬ水底の
秘めたる戀の音にいづる
おとなひの如聞かれつつ、
まろらの月のおもて、また
わが心をばうつすとも
見えて、ああその戀心
いと堪へがたき宵なりき。
牧の子が舟ゆるやかに
東の岸をこぎ出でぬ。

高窓洩れて、夢深き

月にただよふ姫が歌、
今宵ことさら澄み入りて、
ああ大川も今しばし
流れをとどめ、天地の
よろづの魂もその聲の
波にし融けて浮き沈み、
ただ天心の月のみか
光をまして、その歌の
切なる訴へ聴くが如、
この世の外の白鳥の
かがなき高き律ももて、
水面しづかにいわたれば、

しのびかねてや、牧の子は
擡かなげすてて、中流の
水にまかする獨木舟、
舟をも身をも忘れ果て、
息もたえよと一管の
笛に心を吹きこみぬ。

たちまち姫が歌やみて、
窓はひらけぬ。月影に
今こそ見ゆれ、玲瓏の
光に浮ぶ姫が面。
小手をばあげて招げども、

擡なき舟はとどまらず。
舟も流れて、人も流れて、
笛のしらべも遠のくに、
呼ぶ名知らねば、姫はただ
慣れにし歌をうたひつつ、
背をのびあがり、のびあがり、
あなやと思ふまたたきに、
袖ひらめきて、窓の中
姿は消えぬ。川のおも
月は百千にくだかれぬ。

かくてこの夜の月かげに

姫がみ魂も、笛の音も
はてなき天にとけて去り、
かなしき戀の夢のあと
獨木の舟ともろともに、
人知りがたき海原の
秘密の底に流れけり。

(甲辰九月十七日夜)

枯 林

うち重む櫛の朽葉の
厚衣、地は聲なく、
雪さへに樹々の北蔭

白銀の楯に掩へる

冬枯の丘の林に、

日をひと日、吹き荒みたる

風のたたかひ果てて、

肌寒の背に迫る

日落ち時、あはき名残の

ほころびの空の光に

明に透く幹のあひだを

羽鳴らし移りとびつつ、

けおさるる冬の沈黙を

破るとか、いとせはしげに、

羽強の胸毛赤鳥

山の鳥小さき啄木鳥

木を啄く音を流しぬ。

さびしみに胸を捲かれて、

うなだれて、黄葉のいく片

猶のこる櫓の木下に

佇めば、人の世は皆

遠のきて、終滅に似たる

冬の晩、この天地に、

落ちて行く日と、かの音と、
我とのみあるにも似たり。

枝を折り、幹を撓めて
吹き過ぎし破壊のこがらし
あともなく、いとおごそかに、
八千とせの歴史の如く、
また廣き墓の如くに、
しじまれる櫛の林を
わが領と、寒さも怖ぢず、
氣負ひては、音よ坎々、
冬木立の幹をつつきて
しばらくも絶間あらせず。
いと深く、かつさびれたる
その響き遠くどよみて、

山彦は山彦呼びて、
今はしも消えにし音と
まだ残る音の経緯
織りかはす樂の夕浪、
かすかなるふるひを帯びて、
さびしみの潮路遠く、
林こえ、粘野をこえて、
夕天に、また夕地に
くまもなく溢れわたりぬ。

われはただ氣も遠々に、
瘦肩を楯にならべて、

骨の如、動きもえせず、
目を瞑ぢて、額をたるれば、
かの響き、今はた我の
さびしみの底なる胸を
何者か鋭さくちはしに
つつきては、靈呼びさます
世の外の聲とも覺ゆ。

ああ我や、詩のさびし兒、
若うては心よわくて、
うたがひには、た悲哀に
かく此處に立ちもこそすれ。

今聞けよ、小さき鳥に、
いのちなき滅の世界に
ただひとり命に勇みて、
ひびかすは心のあとよ、
生命の高きさほひよ。
強ぶるふ羽のうなりは
勝ちほこる彼の凱歌か、
はた或は、我をあざける
矜りの笑ひの聲か。
かく思ひわが願は
いや更に胸に埋りぬ。
細腕は、枯枝なして

ちがらなく膝邊にたれぬ。
しづかにも心の絃に
祈りする歌も添ひきぬ。

日は既に山に沈みて
たそがれの薄影重く、
せはしげに樹々をめぐりし
啄木鳥は、こ度は近く、
わが凭れる楯の老樹の
幹に来て、今日のをはりを
いと高く臆に刻みぬ。

(甲辰十一月十四日)

天火蓋

戀は、天照る日輪の
みづから焼けし蠟涙や、
こぼれて、地に盲ひし子が
冷にとぢける胸の戸の
夢の隙より入りしもの。

夢は、夢なる野の小草、
草が天さす隙間より
おちし一點の火はもえて、
生野、生風、生燄、

いのちの野火はひろがりぬ。

日光うけては向日葵の
花も黄金の火の小笠。
燬かれて我も胸もゆる
戀のほむらの天火盞、
君が魂をぞ焼きにける。

(甲辰十一月十八日)

壁 畫

破壊が住みける堂の中、
讀者群れにしいにしへの

201

200

さかえの色を猶とめて
壁畫は壁に虫ばみぬ。
おもひでこそは我胸の
かべゑなるらし。熄えぬ火の
炎のかほり傳へつつ、
沈黙に曳ける戀の影。

古りぬと壁畫こぼちなば、
たえぬ信のいのちしも
何によりてか記すべき。
虫ばみぬとて思出の
糸をし断たば、如何にして、

聖きをつなぐ天の火の
光に、かたき戀の戸に、
心の城を守るべき。

(甲辰十一月十八日)

炎の宮

女は熱にをかされて、
終焉の床に叫ぶらく、
『我は炎の宮を見き。
宮は、初めは生命の
緑にもゆるる若き火の、
たちまちかはる生火渦、

202

赤龍をどる天塔や。
見ませ今はた漸々に、
ああ我が夫よ、神々し
御燭に咲く黄の花と
もゆる炎の我が宮を。
やがては融けて白光の
雲輪い照る日とならば、
君をつつみて地の上に
天の新宮立ちぬべし。』

203

『見ませ、』と云ふに、『何處に、』と
問へば、『此處よ、』と、眞白なる

腕かみでに抱く玉の胸。――
胸は、いまはの息深く、
愛の波、また死しの波の
寄せてはかへすときめきを
照らすは月の白き影。

(甲辰十一月十八日)

のぞみ

一

やなぎ洩る
月つきはかすかに
額ぬかを射やて、ほの白し。

かすかなる『のぞみ』の歌は、
砂原すなはらにうちまろぶ
若人わかひとの琴ことにそひぬ。

つきかげは
やや傾かたむぶきぬ。
川柳かわやなぎに風かぜやみぬ。
おもへらく、ああ我が望のぞみ、
かたぶきぬ、衰おとろへぬ。
夢ゆめのあと、あはれ何處いづこ。

二

月かげの
沈むにつれて、
白き額また垂れぬ。
ああいのち、そはかの薔薇、
蕾なる束の間の
まだ咲かぬ夢の色か。

あるは又、
なげきの丘に
ふと萌えし夢小草、
根をひたすなげきの水に
培はれ、かなしみの

穢と咲く黄の小花か。

わが望み、

(夢の起伏)

ゆめなれば、砂の上の
身は既に夢の残骸、
かたぶきぬ、おとろへぬ、
夢のあと、あはれいづく。

三

月落ちて、
心沈みて、

聲もなき暗の中、
琴は猶、のこる一絃、
雲路にも星一つ、
『のぞみ』をば地にたたず。

たれし額、
ややにあがりぬ。
彼は云ふ、わが望み、
夢ならば永世の夢よ、
うつり行く『時』の影、
起伏は皆夢ぞと。

わかうどは
されたる絃を
星かげにつなぎつつ、
起ちあがり、又勇ましく
ほほゑみて、砂の原
趁ひ行きぬ、生命の影を。

(甲辰十一月十九日)

眠れる都

(京に入りて間もなく宿りける駿河臺の新居、窓を開
けば、竹林の厓下、一望臺の谷ありて眼界を埋めたり。
秋なれば夜毎に、臺の上は重き霧、霧の上に月照りて、
永く山村僻陬の間にありし身には、いと珍らかの眺

めなりしか。一夜興をえて勿々筆を染めけるもの
乃ちこの短調七聯の一詩也。「枯林」より「二つの影」ま
での七篇は、この蕨の谷にのぞめる窓の三週の假住
居になれるものなりき。

鐘鳴りぬ、

いと莊嚴に、

夜は重し、市の上。

聲は皆眠れる都

瞰下せば、すさまじき

野の獅子の死にも似たり。

ゆるぎなき

霧の巨浪、

白う照る月影に

氷りては、市を包みぬ。

港なる百船の

その如、燈影洩るる。

みおろせば、

眠れる都、

ああこれや、最後の日

近づける血汐の城か。

夜の霧は、墓の如、

ものみなを封じ込めぬ。

百萬の

つかれし人は

眠るらし、墓の中。

天地を霧は隔てて、

照りわたる月かけは

天の夢地にそそがず。

聲もなき

ねむれる都、

しじまりの大いなる

聲ありて、霧のまに／＼

ただよひぬ、ひろごりぬ、

黒潮のそのどよみと。

ああ聲は

晝のぞめきに

けあされしたましひの

打なやむ罪の唸りか。

さては又、ひねもすの

たたかひの名残の聲か。

我が窓は、

濁れる海を

透らせる城の如、

遠寄に怖れまどへる
詩の胸守りつつ、
月光を隈なく入れぬ。

(甲辰十一月廿一日夜)

二つの影

浪の音の
樂にふけ行く
荒磯邊の夜の砂、
打ふみて我は辿りぬ。
海原にかたぶける
秋の夜の月は圓し。

214

ふと見れば、
ましろき砂に
影ありて際やかに、
わが足の歩みはこべば、
影も亦歩みつつ、
手あぐれば、手さへあげぬ。

215

とどまれば、
彼もとまりぬ。
見つむれど、言葉なく
ただ我に伴なひ來る。

目をあげて、空見れば、
そこにまた影ぞ一つ。

ああ二つ、

影や何なる。

とする間に、空の影、

夢の如、消えぬ、流れぬ。

海原に月入りて、

地の影も見えずなりぬ。

我はまた

荒磯に一人。

ああ如何に、いづこへと

消えにしや、影の二つは。

そは知らず。ただここに。

消えぬ我、ひとり立つかな。

(甲辰十一月廿一日夜)

夢の宴

幻にほふ花染の

朧や、卯月、夜を深み、

春の使の風の兒は

やはら光翹の羽衣を

花充つ枝にぬぎかけて、
熟睡もなかの苑の中、
千株櫻の香の夢の
おぼろをおぼろ、月ぞ照る。

二

ここよ、これかのおん裾の
縄れにゆらく夢の波
曳きて過ぎます春姫が、
供奉の花つ女つどはせて、
明日の淨化のみちすじを
評定したまふ春の城。

春は日さかる野にあらで
夢みて夢を趁ふところ。

三

さりや、萬枝の花衣、
新映つくる櫻樹の
かげに漂ふ讃頌も
聲なき夢の聲にして、
かほりはたそれ、この國の
温みよ、歌よ、彩波よ。
まろらの天の影こそは
舞ふに音なきおぼろなれ。

四

『梅』は北濱海人が戸へ。
 『柳』は、玉頬ゆたかなる
 風の兒を率て、狭野の邊の
 發句の翁の門を訪へ。
 『さくら』と『桃』は殿軍の
 女の子をここにつどへよと、
 評定のあとに姫神の
 下知それぞれにありぬれば、
 今宵のわかれ、いざやとて、
 夢いと深き歡樂の

宴は春のいのちかも。
 しろがね黄金すずやかに
 つどひの鳥笛仄に鳴り、
 苑は『さくら』の音頭より
 ゆるる天部の夢の歌。

五

見れば、咲きみつ夢の花、
 櫻のかげの匂ひより
 つどひ寄せたるものの影、
 和魂、人のうまいより
 のがれて、暫し逍遙ふか、――

あゆみ軽らかに、やはらかに、
躑つちをはなれつつ、
裸々の美肌ましろなる
乳房ゆたかに月吸ひて、
百人、千人、萬人、
我も我もと春姫が
小姓の撰に入らむとか、
つどひよせては、やがてかの
花つ女どもに交りつつ、
舞よ、謡よ、耻もなき
ゆめの苑生の興なかば。

六

もつれつ、とけつ、めぐりつつ、
歌の彩糸捲きかへす
舞の花輪は、これやこれ
捲きてはひらく春宵の
たのしき夢の波ならし。
波の起伏身にしめて
舞へば、うたへば、暫しどて
眠りの床をのがれ來し
和魂ただになごみつつ、
夢は時なき時なれば、
(ああ生ならぬ永生よ)

かへるを忘れ、ひたぶるに
天舞花唱の夢の人。
月はおぼろに、花おぼろ、
おぼろの帳地にたれて、
いま天地の隔てさへ、
ゆめの心にとけらせて、
永遠を暫しの天の苑。

七

月は斜めに、舞倦じ、
快樂やうく傾ぶけば、
見よや、幾群、いくそ群、

みたり、五人、つどひつつ、
歌の音なきどよみにか
ゆられて降れる葩に
みどりの髪をほの白き
花のおぼろの流れとし、
惜しむ氣もなく羽衣を
土に布きては、花の精、
また人の精、ともく、
夢路深に入る陸語。
或は熟睡の風の兒が
ふくらの頬に指ついで、
驚き覺むる兒が顔を

『あら笑止や』と笑つくり、
或は『柳』の精が背の
枝垂の髪を、たわわなる
さくらの枝に結びては、
『見よこれ戀のとらはれ』と
乳房をさへて打囃す。
ああ幻のきよらなる
ここや淨化の愛の城。

八

この時ひとり供奉の女が、
匂ひなまめく圓肩の

髪を滴だるはなびらを
そと拂ひつつ、語るらく、
『ああこのうまし夢の宴
すぎて幾夜のそのあとよ、
ゆめの心のあとは皆
あつき眞夏の火の室に
やかれむのちの如何にぞ』と。
さくや、忽ち花『さくら』
肉ゆたかなる胸をらし、
『ああ悲しみよ、運命よ、
夢は汝等の友ならず。
笑よ、おぼろよ、愛よ、香よ、

いで今、更に一さしを、
春の門出に、この宵の
わかれに舞ふて、うたへよ』と、
立てば、『げにも』と、まためぐる
夢の波こそ春の音や。

九

かくて、やうく夜はくだち、
かへり見がちに和魂の
わかれく、て、姫神が
花幔幕の玉輦
よそひ新たになりぬれば、

風の兒はまづ脱ぎ置きし
光ある羽の衣をきて、
黄金の息を吹き出すや、
朝よぶ鐘の朗々と
花のゆめをばさましつつ、
『浄化の路に幸あまれ
光あまれ』と、ひとしきり
つちに淡紅なる花摺りの
錦布き祝ぐ櫻花。
東の空にほのぼのと
春の光は溢れける。

うばらの冠

銀燭まばゆく、葡萄の酒は蒸じ、
玉装花袖の人皆酔ひにけらし。
ふけ行く夜をも忘じて、盃をあぐる
こやこれ歡樂つさせぬ夏の宴。
人皆黄金のかがやく冠つけて、
天下の富をば、華榮をばあつめぬるに、
ああ見よ、青磁の花瓶、百合の花の
萎れて火影にうつむく、何の姿。
願ふは大臣よ、野に咲く清き花は

ただ野の茨の葉蔭に捨てて置けよ。
野生の裸々なる美し花の矜り、
そは君、この夜の宴にあづかるべく
あまりに貧しく、小さし。許せ君よ、
清きにふさふはうばらの冠のみぞ。

(甲辰十二月十日)

心の聲 (七章)

電光

暗をつんざく雷光の
花よ、光よ、またたきよ、

流れて消えてあと知らず、
暗の綻び跡とめず。

去りしを、遠く流れしを、
東の間、——ただ瞬きの閃めきの
はかなき影と、さなりよ、ただ『影』と
見もせば、如何に我等の此生の
味さへほこる値さへ、
たのみ難なき約束の
空なる無なる夢ならし。

立てば、秋くる丘の上、

暗いくたびかつんざかれ、
また縫ひあはされて、電光の
花や、光の尾は長く、
疾く冷やかに、縦横に
西に東にきらめきぬ。

見よ、鋼色の空深く
光孕むか、ああ暗は
光を生むか、あらずく。
死なし、生なし、この世界、
不滅ぞただに流るるよ。
ああ我が頭おのづと垂るるかな。

かの束の間の光だに
『永遠』の鎖よ、無限の大海の
岸なき波に泳げる『瞬時』よ。
影の上、また夢の上に
何か建つべき。來ん世の榮と云ふ
それさへ遂にあだなるかねごとか。
ただ今我等『今』こそは、
とはの、無限の、力なる、
影にしあらぬ光と思ほへば、
散りせぬ花も、落ち行く事のなき
日も、ちのづから胸ふかく
にほひ耀き、笑み足りて、

跡なき跡を思ふにも
隨喜の涙手にあまり、
足行き、眼むく所、
大いなる道はろくくと
我等の前にひらくかな。

祭の夜

踊りの群の大なだれ、
酒に、晴着に、どよめきに、
市の祭の夜の半ば、
我は愁ひに追はれつつ、

(甲辰十二月十一日)

秋の霧野をあてもなく
袂も重くさまよひぬ。

歩みにつれて、迫りくる
霧はますます深く閉ぢ、
霧をわけくる市人の
祭のどよみ、漸々に
とだえもすべう遠のきぬ。

やがて名もなき丘の上、
我はとまりぬ、墓石と。――
寄せては寄する霧の波、

その波の穂と音もなく
なびく尾花は前後、
我をめぐりぬ、城の如。

すべての聲は消え去りて、
ここに大なる聲充てり。
すべての人はえも知らぬ
ここに立ちたれ、神と我。

我ひざまづき、聲あげて
祈りぬ、『あはれ我が神よ、
爾を祭る市人の

舞樂の庭に行きはせて、
などかは、弱きこの我を
さびしき丘に待ちはせし。
語れよ、語れ、何事も
さくべきものは我のみぞ。
我は爾の僕よ、と。
答ふる聲か、鞆々と
(力あるかな) 深霧は
二十重に捲きぬ、我が胸を。

(甲辰十二月十一日)

曉霧

熟睡の床をのがれ行く
夢のわかれに身も覺めて、
起きてあしたの戸に凭れば、
市の住居の秋の庭
閉ぢぬる霧の鞆々と
迫りて、胸にい捲き寄る。

ああ清らなる夢の人、
溷る巷の活動の
塵に立つべく、今暫し、
汝が生命の淨まりの
矜り思へと、霧こそは

寄せて魂をし包むかな。

(甲辰十二月十二日)

落葉の煙

青桐、楓、朴の木の
葉落あつめて、朝の庭、
焚けば、秋行くところまで、
けむり一條蕭條と
蒼小渦の柱して、
天のもなかを指ざしぬ。

ああほほゑみの和風に

揺りおこされし春の日や、
またあこがれの夏の日の
日熾る庭に、生命の
さほひの色をもやしける
榮や、如何に。——消えうせぬ、
過ぎぬ、ほろびぬ、夢のあと。
今ただ冷ゆる灰のこし、
のぼる煙も、見よやがて、
地をはなれて、消えて行く。——

これよろこびのうたかたの
消ゆる嘆きか、悲しみか。

さあれど、然れど、人よ今
しばし涙を抑へつつ、
思はずや、この一條の
きゆる煙のあとの跡。

春ありき、また夏ありき。――
その新心地、深縁、
再び、永遠にここには訪ひ來ぬや。
よし來ずもあれ。さもあらば、
この葉を萌やし、光を、生命を
あたへし力、ああ其力、また、
今この消ゆる煙ともろともに

消えて、ほろびて、あとなきか。
見ゆるものこそ消えもすれ、
見えざる光、いづこにか
消ゆべき、いかに隠るべき。

さらば、ただこの枯葉さへ、
薄煙さへ、消えさりて、
却りて見えぬ、大いなる
高き力ともろともに、
渾ての絶えぬ生命の
奥の光被に融けて入る
不朽のいのち持たざるか。

人よ、にはかに『然なり』とは
答ふる勿れ。されどかく
思ふて、今し消えて行く
けむり見るだに、うす暗き
涙の谷に落とすべく、
われらのいのちあまりに尊ときを
値多きを感じずや。

(甲辰十二月十二日)

古瓶子

うてば坎々音さぶる

245

244

素焼の、あはれ、煤びし古瓶子、
注げや、滓まで、いざともに
冬の夜寒を笑はなむ。

今宵雪降る。世の罪の
かさむが如く、暇なく雪は降る。
破庵戸もなき我なれば、
妻なり、子なり、ああ汝。

わらへよ、村酒一酔は
寒さも貧もをかさぬ我が宮ぞ。
去れ、去れ、涙、かなしみよ、

笑ふによろし古瓶子。

世の罪つちに重む如、

ふりぬ、つもりぬ、荒野の夜の雪。

雪は座にまで舞ひ入りて

燭臺のともし盡きなんず。

酒早やなきか、それもよし、

灰となりぬる、寒爐の薪も、早や。

よし、よし、さらば古瓶子、

汝を枕に世外の夢を見む。

(甲辰十二月二十二日)

救済の綱

わづらはしき世の暗の路に、

ああ我れ、久遠の戀もえなく、

狂ふにあまりに小さき身ゆゑ、

ただ「死」の海にか、とこしへなる

安慰よ、眞珠と光らむとて、

渦巻く黒潮下に見つつ、

飛ばむの刹那を、眸と許り、

我をば搦めて巖に据ゑし

ああその力よ、信のみ手の

救済の綱とは、今ぞ知りぬ。

あさがほ

ああ百年の長命も
暗の牢舎に何かせむ。
醒めて光明に生くるべく、
むしろ一日の榮願ふ。
寝がての夜のわづらひに
昏耗けて立てる朝の門、
(これも慈光のほほゑみよ、)
朝顔を見て我は泣く。

(甲辰十二月二十二日夜)

『心の聲』畢

白鷺

愁ひある日を、うら悲し
鶴の啼く音の堪へがたく、
水際の鳥屋の戸をあけて
放てば、あはれ、白妙の
蓮の花船行くさまや、
羽搏ち静かに、秋の香の
澄みて雲なき青空を、
見よや、光のしただりと、
眞白き影ぞさまよへる。

ああ地の悲歌をいのちとは
をさなき我の夢なりし。
ひたりも深き天の海
一味のむねに放ちしを
白鶴に何うらむべき。
落とす天路の歌をきき、
ましろき影をあふぎては、
寧ろ自由なる逍遙の
遮りなきを羨まむ。

(乙巳一月十八日)

傘のぬ志

250

柳の門にただずめば、
胸の奥より擣くに似る
鐘がさそひし細雨に
ぬれて、淋しき秋の暮、
絹むらさきの深張の
小傘を斜に、君は來ぬ。
もとより夢のさまよひの
心やさしき君なれば、
あゆみはゆるき駒下駄の、
その音に胸はきざまれて、
うつむきとづる眼には
仄むらさきの霞わせぬ。

251

袖やふるると、をののぎの
もろ手を置ける胸の上、
言葉も落ちず、手もふれず、
歩みはゆるき駒下駄の
その音に知れば、君過ぎぬ。
ああ人もなき村路に
かへり見もせぬ傘の主、
心いためて見送れば、
むらさきの霞やうくに
あせて、新月野にいづる
空のうるみも目に添ひつ、

柳の雫ひややかに
冷えし我が頬に落ちにける。

(乙巳一月十八日)

落 櫂

磯回の夕のさまよひに
砂に落ちたる牡蠣の殻
拾うて聞けば、紅の
帆かけていにし曾保船の
ふるき便もこもるとふ
青潮遠きみむなみの
海の鳴る音もひびくとか。

古城の庭に松笠の
土をはらふて耳にせば、
もも年過ぎしその昔の
朱の欄めぐらせらる
殿の夜深き御簾の中、
千鳥縫ひたる匂ひ衣
行燈の灯にうちかけて、
胸の秘戀泣く姫が
七尺落つる秋髪あきかみの
慄おそひを吹きし松の風
かすけき聲にわたるとか。
ああさは君が玉の胸、

青潮遠き南の
海にもあらずももとせの
古き夢にもあらなくに、
などかは、高き彼岸の
うかがひ難き園の如、
消息もなきふ九年を
霽のかなたに秘めたるや。
君夕毎にさまよへる
ここの櫻の下蔭に、
今宵おぼろ夜十六夜の
月にひかれて来て見れば、
なよびやかなる弱肩に

こぼれて匂ひ添へにけむ
落葩おちばなよ、地に布しきて、
夢の如くもほの白き
中にかがやく波の形かた、
黄金の蒔繪まきゑあざやかに
ああこれ君が落櫛おちぢよ。
わななきごころ目を瞑とぢて、
ひろうて耳にあてぬれど、
君が海なる花潮はなうしほの
響きもさかず、黒髪くろかみの
見せぬゆらぎに秘め玉ふ
み心さへもえも知れぬ。

まどひて胸にかき抱き
泣けば、百ひゃくの齒は皆生きて、
何をうらみの蛇くちなはや、
ああふたとせのわびしらに
なさけの火蓋ひたぎもえくゝて
瘦やせにし胸を捲まきしむる、

(乙巳二月十八日夜)

泉

森の葉を蒸むす夏照なつてりの
かがやく路のさまよひや、
つかれて入りし楡やなぎの木の

下蔭に、ああ瑞々し、
百葉を青の御統と
垂れて、浮けたる夢の波、
眞清水透る小泉よ。
いのちの水の一掬、
いざやと下りて、深山の
小嶺の如く、勇みつつ、
もろ手をのべてうかがへば、
しら藻は髪にかざさねど
水神か、いかに、笑はしの
ゆたにたゆたにももの影、
紫三稜草花ちさき

水面に匂ふ若眉や、
玉頬や、瑠璃のまなざしや。
ああ一筆掬はねど、
口は無花果香もあまき
露にうるほひ、涼しさは
胸の奥まで吹きみちぬ。
夢と思ふに、夢ならぬ
さと云ふ音におどろきて
眼あぐれば、夢か、また、
木の間まぼろし鮮やかに
垂葉わけつつ駈けて行く。――
さは黒髪やさゆらぎに

小肩なよびの少女よ。――
ああ常夏のまぼろしよ、
など足早に過ぎ玉ふ。
ねがふは君よ、夢の森
にほふ緑の涼影に
暫しの安寝守らせて、
(しばしか、夢の永劫よ。)
われ夢守とゆるせかし。
目さめて仄に笑ます時、
もろ手は玉の泪坏、
この眞清水を御泔水に
手づから君にまゐらせむ。

ああをとめごよ、幻よ、
はららの袖や愛の旗、
などさは疾き足どりに、
天の鳥船のかくろひに、
緑の中に消えたまふ。

(乙巳二月十九日夜)

青鷺

隠沼添ひの丘の麓、
漆の木立時雨れて
秋の行方をささと
たづねて過ぎし跡や、

青鷺色の霜ばみ、
斑らの濡葉仄に
ゆふべの日射燃えぬ。

野こえて彼方杉原、
わづかに見ゆる御寺の
白鳩とべる屋根や、
さびしき西の明るみ、
誰が妻死ねる夕ぞ、
鏡鉞遠く鳴りて、
涙も落つるまきまり。

る凭れば、漆若樹の
黄朽葉はら、胸に
拱ぬぐ腕をすべりぬ。
ふと見るけはひ、こは何、
隠沼碧の水嵩の
蘆の葉ひたすほとりに
青鷺下りぬ、静かや。
立つ身あやしと凝視るか、
注ぐよ、我に、小睡。
あな有難の姿と
をろがみ心、我今

鳥の目底に迫るや、
尾被さきと啼きて
漆の木立夕つけぬ。

(乙巳二月二十日)

小田屋守

身は鄙さびの小田屋守、
首着白き花床の
日照りの小畔、まるび寝て、
足るべらなりし田子なれば、
君を戀ふとはえも云へぬ、
水無月笠とび亂れ、
暖き風吹く背の間を、

ひるがほ草の蔓ながさ
小田の小徑を匂はせし
都ぶりなるおん袖に
ゆきずり心蕩かせし
その移り香の胸に泌み、
心の栖家君にとて
なさけの小窓ひさしより、
ああ吹く笛のみだれ音や、
みだりごころは、青波の
稻田の畔の堰さかねて
夏照り走るぬるみ水、
世に許りがたき貴人の

御姫なる君を追ひぞする。
今は四方田の稻たわわ、
琥珀の玉をむすべるに、
ひめてはなたぬ我が思ひ、
ただわびしらの思寝の
涙とこそはむすぼふれ、
ああ玉苑のふかみ草
大き葩啄まむとて
追ひやはらはれし野の鳥の
つたなき身様まねけるや。
こよひ刈穂の庵の戸に
八束穂守る身を忘れ、

小田刈月の亥中月、
君知りしより百夜ぞと
さまよひ來ぬるみ館の
木樵花咲く垣のもと、
灯かけ明るき高窓に
君が弾くなる想夫憐。
ああ鄙さびの小田屋守、
笛なげずて、花つみて、
花をば千々にさきすてて、
溝こえ、厚き垣をこえ、
君が庭には忍び入る。

凌霄花

鐘樓の柱まき上げて
あまれる蔓の幻と
流れて石の階の
苔に垂れたる夏の花、
凌霄花かがやかや。
花を被さて物思へば、
現ならなく夢ならぬ
ただ影深の花の路、
君ほほゑめば霞かほり
我もの云へば蕾咲く

歩み音なき遠つ世の
苑生の中の逍遙の
眩ゆさいのち近づくよ。
身は村寺の鐘樓守、――
君逝きしより世を忘れ、
孤兒なれば事もなく
御僧に願ひゆるされて、
語もなき三とせ夢心地、
君が墓あるこの寺に、
時告げ、法の聲をつけ、
君に胸なる笑みつけて、
わかきいのちに鐘を撞く。――

君逝にたりと知るのみに、
かんばせよりも美しくしき
み靈の我にやどれりと
人は知らねば、身を呼びて
うつけ心の啞とぞ
あざける事よ可笑しけれ。
あやめ鳥鳴く夏の晝
御寺まゐりの徒歩の路、
ひと日み供に許されて、
この石階の休らひや、
凌霄花花二つ
摘みて、一つはわが襟に、

一つは君がみつむりの
かざしに添へてほほゑませ、
み姉と呼ぶを許りにける
その日、十六かたくなの
わが胸涵す匂ひ潮、
あほ龍の名は知らね、
映ゆき花船うかべしか。
さればこの花、この鐘樓、
我が魂の城と見て、
夏ひねもすの花まもり、
君が遺品の香はこのころ
上つ代ぶりの小忌衣、――

昔好みの君なれば
嘗ては御簾のかけ近き
衣桁にかけて、空薫の
風流もありし香のあとや、
青草摺の白絹に
袖にかけたる紅の紐、
年の経ぬれば裾されて
鶉衣となりたれ、
君が遺品と思ほへば
猶わが身には玉袍と、
男姿にうち襲ね、
人の云ふ語は知らねども、

胸なる君と語らふに、
のうぜんかづら夏の花
かがやかなるを、薫ずるを、
かの世この世の浮橋の
『影なる園』の玉の文字。
花を被きて、石に寝て、
君が身めぐる照る玉の
眩ゆきいのち招ぎつつ、
ああ招ぎつつ、迎へつつ、
夕つけくれば、朝くれば、
ほほゑみて撞く巨鐘の
高き叫びよ、調和よ、――

その聲すでに君や我
ふたりの魂の船のせて
天の門にし入りぬれば、
人の云ふなる放心者、
身は村寺の鐘樓守、
君に捧げし吾生命の
この喜びを人は知らずも。

(乙巳二月二十日夜)

草 莓

青草かほる丘の下、
小唄ながらに君過ぐる。

274

夏の日ざかり、野良がよひ、
駒の背にして君過ぐる。
君くると見てかくれける
丘の草間の夏莓、
日照りに蒸れて、青牀や、
草いきれする下かげに、
天の日うけて情ばみ
色ばみ燃えし紅の珠、
鶉の床の丘の邊に
もとより鄙の草なれど、
ああ胸の火よ、紅の珠、
とどろぎ心ひざまづき、

275

手觸れて見れば、うま汁に
あへなく指の染みぬるよ。
素足草刈る身は十五、
夏草しげる中なれば、
心の荷はかくれたれ、
くろ髪捲ける藍染の
白木綿君に見えざるや。
過ぎし祭の春の夜、
おぼろ夜深み、酒ほぎの
庭に、手とられ、袖とられ、
君に撰られて、はづかしの
唄に盃さされける

ああその夜より、姿よき、
駒もち、田もち、家もちの
君が名になど、頬の熱る。
今君行くよ、丘の下、――
かがやく路を、若駒の
白毛ゆたかの乗様や、――
聲し立てねば、えも向かて
小唄ながらに君行くよ。
ああ草蔭の夏荷、
天の日うけて情ばみ
色ばみ燃えて、日もすがら
くちびる甘き幸までど、

醜草なれば、君が園
枝瑞々くし林檎の
欄子に盛られ、手にとられ、
君がみ唇に吸はるべき
木の實の幸をうらみかねつも。

(乙巳二月廿一日)

めしひの少女

『日は照るや。』聲は青空

白鶴の遠きかが啼き、――

ひむがしの海をのぞめる

高殿の玉の階

278

白石の柱に凭りて、
かく問ひぬ、盲目の少女。
答ふらく、白銀づくり
うつくしき兜をぬぎて
ひざまづく若き武夫、
『さなり。日は今浪はなれ、
あざやかなの光の廻り、
丘を超え、夏の野をこえ、
今君よ、君が恁ります
白石の圓き柱の
上半ば、なびくみ髪の
あたりまで黄金に照りぬ。

279

やがて、その玉のみ面に
かゞやきの夏のくちづけ、
又やがて、薔薇の苑生の
石彫の姿に似たる
み腰にか、い照り絡みて、
あまりぬる黄金の波は
我が面に名残を寄せむ。』
手をあげて、めしひの少女、
圓柱を、と撫りつつ、
さて云ひぬ、『げに、あたたかや。』
また云ひぬ、『海に帆ありや。
大空に雲の浮ぶや。』

武夫はつと立ちあがり、
答ふらく、力ある聲、
『ああさなり。海に帆の影、
いづれそも、遠く隔てて、
君と我がなからひの如、
相思ふとつくに人の
文使乗する船なれ、
紅の帆をばあげたり。』
大空に雲はうかばず、
今日もまた、熱き一日。――
君とこそ薔薇の下蔭
いと甘き風に酔ふべき

天地の幸福者の
我にかも厚き恵みや、
大日影かくも照るらし。』
少女云ふ、『あさはあれど、
君はただ見ゆるこそ見め。
この胸の燃ゆる日輪、
いのちをも焼きほろぼすと
ひた燃えに燃ゆる日輪、
み眼あれば、見ゆるを見れば、
えこそ見め、この日輪を。』
武夫はいらへもせず、
寄り添ひて強き眩やき、

『君もまた、えこそ見め、我が
双眸の中にかくる
たましひの、君にと燃ゆる
みち足らふ日のかがやきを。』
かく云ひて、少女を抱き、
たましひをそのたましひに、
唇をその唇に、
(生死のこの酔心地)
もえもゆる戀の口吻。—
口吻ぞ、ああげに二人、
この地に戀するものの、
胸ふかき見えぬ日輪

相見ては、心休むる
唯一の瞳なりけれ。――
日はすでに高にのぼりて、
かき抱く二人、かゞやく
白銀の兜、はたまた、
白石の回き柱や、
また、白き玉の階、
おほまかに、なべての上に
黄金なす光さし添へ、
高殿も戀の高殿、
天地も戀の天地、
勝ちほこる胸の歡喜は

光なす凱歌なれば、
丘をこえ、青野をこえて、
ひむがしの海の上まで
まろらかに溢れわたりぬ。

(乙巳三月十八日)

來し方よ、破歌車
 綱かけて、息もたづく、
 過ぎにしか、ごしき坂を
 あたらしきいのちの花の
 大苑の春を見むとて。

(この集のをはりに)

あこがれ 畢

286

明治三十八年五月
 明治三十八年五月
 小島印刷
 小島印刷

あこがれ奥附

定價金五拾錢

著者 石川 啄木

東京市京橋區南大工町五番地

發行者 小田島 嘉兵衛

東京市京橋區南大工町五番地

發行者 小田島 尙三

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷者 石川 金太郎

東京市京橋區西紺屋町二十六七番地

印刷所 株式會社 秀英 舍

不許
 複製

發行所

東京市京橋區
 南大工町五番地

小田島書房

和歌浦次郎君著○菊判百六十頁○全一冊

病葉枯葉

定價 參拾錢
郵稅 四錢

本書容むる所二十篇數十種の新聞雜誌既に定評あり、左に其二三を掲げて讀者の參考

時代思潮評

名けて病葉枯葉と云ふ其の名既に人目を引くに足る其の自序に曰く「若し色あらば、そは只病

葉の流色のみ若し響きあらばその只枯葉の空鳴のみ「爛葉は枯葉の運命なり」と豈それ然らんや「天地の妙」「櫻牛

日本評

著書として、寧ろ片々たる一冊子に過ぎぬ。特に前人の道破せぬ卓説があるといふのでもないが、

眞率の言評諷刺の辭、世の衞學者流の著と轍を同じうせぬ點を異とするのである。故人子規を論じ、兆民を品し、櫻
牛を評する言の如き、凡百の世評以外卓然として一見識を見るべきである。隨感隨録中に
兆民は奇人なり偉人にあらず、如何にも其死は立派なり、されど臨終の立派は未だ以て偉人の證となすに足ら
ず、若し臨終の立派を以て偉人の證となさば、稻妻強盜も亦た優に偉人となすに足らん(下略)
子規は特調なり、而して彼は終始一貫の事業にして人物亦之に適ふ者、子規は慥に偉人なり。凡そ終始一貫は
偉人の特調なり、而して彼は終始一貫の事業にして人物亦之に適ふ者、子規は慥に偉人なり。凡そ終始一貫は
或は彼が病中の不平を笑ふ者あり、されど是れ思はざるの甚だしき者のみ。子規の死は實に莊嚴の死なり、自
然の死なり、於て始めて冠せしむべし。兆民の死に至つては、立派はあり、自然は未だし、嚴肅はあり、赤裸々
未だし、兆民の死には神經の緊張あり、意志の抑制あり、何處となく窮屈なり。
若し夫れ十年ならしめば、或は小韓退之を期待し得ん、日蓮の如きは其カラにあらず。
事なほ十年ならしめば、或は小韓退之を期待し得ん、日蓮の如きは其カラにあらず。
と言へるが如き、或は人物鑑識の消息を解するものがある。著者又た恐らくは、子規の如く赤裸々たらんことを欲
するものか。(大江)

國民新聞評

「只是れ雜然たる雜集のみ只是れ紛然擾然たる病葉群枯著堆のみ……或者は嘗て新聞雜誌の埋

草となり或者は永く篋底に潜伏したり今再び日光の温波に浴するを得たる者は彼等の爲めに幸か不幸か……讀
みもて行く其宇宙觀に人生觀に邦國人物論の評に才氣充溢襟を正すべき文字少からず和歌浦次郎は假の名ならん
抑も誰の筆すさびぞ

近刊豫告 石川啄木著 劇詩の勝利

近 日 發 行

詩壇革新の風雲、凝つて茲に劇詩『死の勝利』成
りぬ。幕をわかつ事五、すべて韻文を以て書かれ
たるもの也。

見よ、これ日東國民の内部生命の絶叫也。見よ、
これ日本新文藝の煙火也。

四六版洋裝美本

2R-19

近刊豫告

石川啄木著

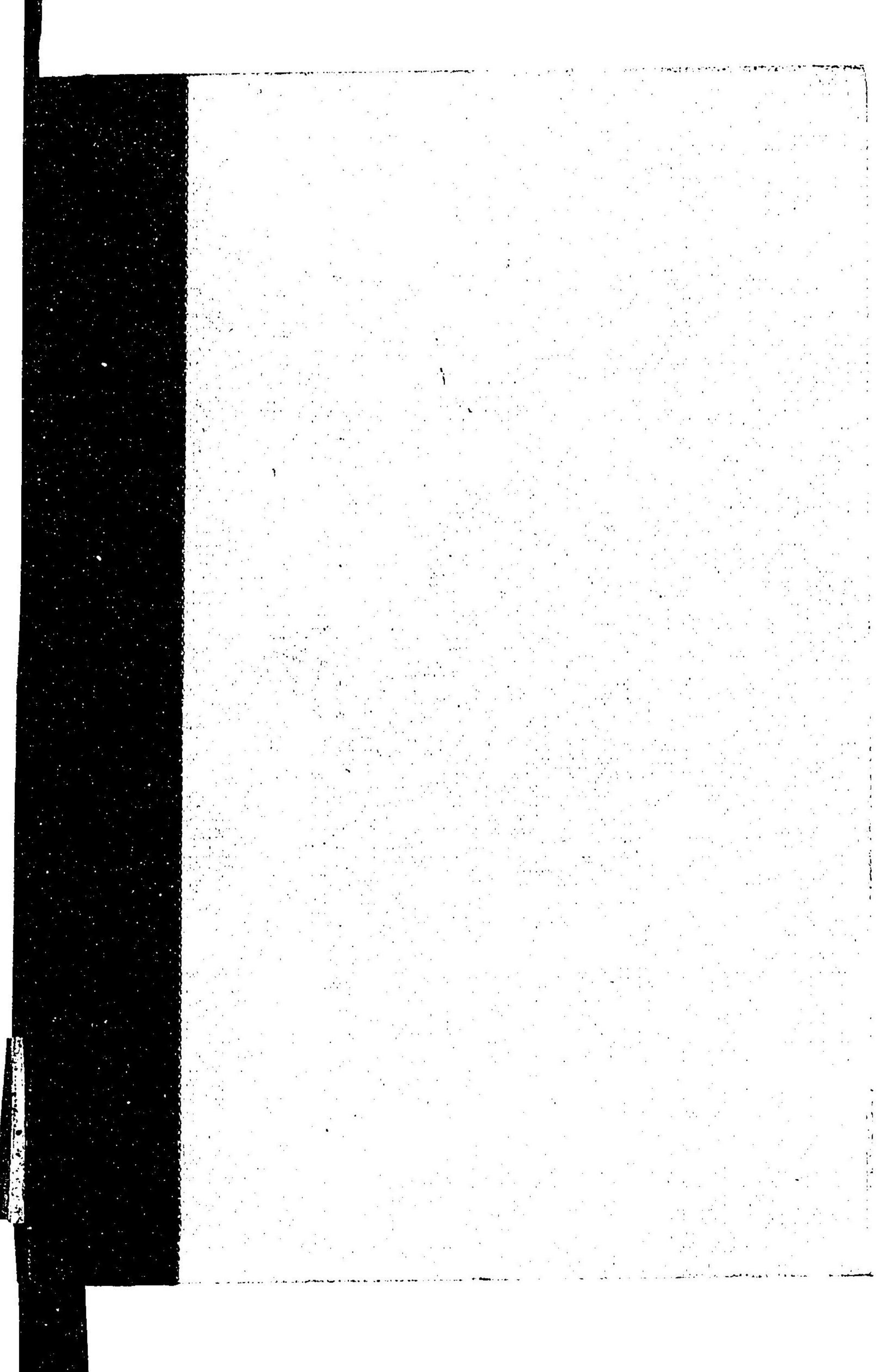
新弦ゆづる

目次

北海の詩
深林
生命環
雑詩數十篇

四六版
洋装美本

これ「あこがれ」の著者が第二の詩集也。北海の詩は著者が甲辰の秋北海に遊べる時の紀念にして、「津輕海峡」、「ヘレン號の甲板」以下十二篇の詩を集め、深林、生命環の二は何れも二千行以上の雄篇、日本詩壇空前の象徴詩なり。その他雑詩數十あり。著者が詩業の發展この書に於て更に眩目すべきものあらむ。乞ふ、新弦弓に上つて一鳴するの時、白羽の長箭何れの天に飛ばむとするかを見よ。



特67

807

あこがれ

石川 啄木

国立国会図書館

087916-000-0

特67-807

あこがれ

石川 啄木/著

M38

DBG-0004

